

2026年度 JICA筑波 大学生・大学院生向け国際協力理解講座(案)
 プログラムNo. 6 : アフリカ地域農業機械化促進

別紙1-⑥

1. 基本情報 *講師や諸般の都合により、プログラム内容が変更になることもあります。予めご了承願います。

1) 研修コース名 :	アフリカ地域農業機械化促進
2) 担当者名 :	松井 駿 (研修コース委託先業務総括 : 山口 浩司)
3) 期間 (日数) :	10月26日 (月) ~ 10月30日 (金) 5日間
4) 定員 :	受入人数 5人程度 (最大10人)
5) 言語 :	英語とフランス語 (日本語の説明も適宜あり)
6) 主な対象学生 :	国際協力分野、アフリカ地域の農村社会、外国のコメなどに関心がある学部生、大学院生。 専門分野、学年、語学力は問いません。
7) 研修員の出身国 :	ガーナ(1)、ナイジェリア(1)、ザンビア(1)、ブルキナファソ(1)、チャド(1)、コンゴ共和国(1)、コートジボワール(1)、マリ(1)、モザンビーク(1)、セネガル(1) ケニア(2)、ジンバブエ(1) ※ () 括弧内は人数

2. コンテンツ

本プログラムの目的	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ地域の農村社会の発展におけるコメの収穫後処理の役割について、講義・実習・ディスカッションを通じて理解する。 ・アフリカ地域と日本で栽培されるコメの形状の違いをはじめ、籾摺り精米の方法、碎米の発生や分離の仕組み、コメの硬さ (剛性) や水分率などについて学ぶ。
-----------	---

日程表

No	日付	曜日	時間	テーマ	概要	
1	2026/10/26	月	09:00-09:25	プログラムオリエンテーション (日本語)	関係者紹介、プログラム説明、諸連絡等	
			09:30-09:40	大学生講座参加者の自己紹介		
			09:40-12:00	コメ品質検査法と各種機器類の構造と取り扱い		討議
			13:30-17:00			討議
2	2026/10/27	火	09:30-12:00	籾摺り・精米および碎米分離などに関する方法	実習 実習 (測定) 項目 ・籾・玄米・白米の水分含量 ・籾から玄米と白米の歩留まり ・碎米分離と碎米率 ・籾・玄米・白米の粒形 (長さ・幅・厚み) ・被害粒の評価など ・その他 これらに関する各種機器の取り扱いを学ぶ	
			13:30-17:00			
3	2026/10/28	水	09:30-12:00	上記同様	実習 上記同様と データ整理	
			13:30-17:00			
			17:00-17:30			中間レビュー (日本語)
4	2026/10/29	木	09:30-12:00	上記同様	実習 上記同様と データ整理	
			13:30-17:00			
5	2026/10/30	金	09:30-11:30	発表会に向けて、各グループ内でデータを検討し、整理する。	討議 データ整理	
			11:30-12:00	試食会	実習 実習で精米した白米を炊飯し、試食する	
			13:30-17:00	各グループのデータをもとに発表会 (PPT 使用)	討議 発表会	
				プログラム振り返り (英語)		

3. 留意事項

<ul style="list-style-type: none"> ・実習では各種の機器類を使用します。安全確保のため整理整頓を心がけ、ケガのないよう必ず研修指導員の指示に従ってください。 ・籾摺り作業では粉塵が多少発生するため、衣服が汚れることがあります。汚れても差し支えない服装で参加してください。 ・日本語の通訳も配置されますが、アフリカ地域の英・仏語圏からの研修員と、英語またはフランス語で積極的にコミュニケーションをとって下さい。 ・実習は、JICA研修員と小グループで実施します。スムーズに進めるため、遅刻や欠席をする場合は、事前に連絡してください。 ・研修中に体調が優れない場合は、無理をせず速やかに研修指導員に申し出てください。 ・研修中の写真撮影や情報・データの取り扱いについては、JICAの指示に従ってください。

4. 学生さんへ一言

アフリカ地域でコメの消費量が増え続けているのはなぜでしょうか。私たちの身近にあるコメを切り口に、アフリカの農村の現状や技術的な課題、そしてこれからの発展について、JICA研修員のみなさんと共に考えていきます。
--

5. その他

最近、日本のコメの価格が気になっていませんか。日本で食べられている丸い粒のコメと、アフリカ地域で一般的な細長いコメには、どのような違いがあるのでしょうか。この研修では、コメの品質検査や籾から白米への加工技術について、アフリカからの研修員 (行政官や技術者) のみなさんと意見交換をしながら、国際協力の現場で求められる知識についても学ぶことができます。
